

## 第3章 白岡市の文化財と歴史文化の特徴

### 1 白岡市の文化財の特徴

第1章白岡市の概要や第2章白岡市の文化財の概要を基に、当市の文化財の特徴をまとめてみたいと思います。

#### (1) 文化財類型別に見た文化財の特徴

##### ① 有形文化財

市内に所在する指定文化財のうち、有形文化財に指定されている資料は、前述の通り県指定1件、市指定28件の合計29件があります。

**建造物** 建造物としての指定の一つに篠津久伊豆神社の社殿があります。篠津久伊豆神社は、康治元年(1142)の創建と伝えられ、鬼窪氏とのつながりの深い神社です。指定となる社殿は、ケヤキ材を用いた権現造で築造は幕末です。木綿や紅花の間屋として財を成した地元の商人「篠川」が私財を投じ、野州(現在の栃木県)から宮大工を招いて贅を凝らした社殿彫刻を施して建てたものであること、これを地域の人々が誇りとしていることが指定の大きな根拠として挙げられています。

庄兵衛堰枠は、庄兵衛堀川の旧流路に設置された煉瓦造の堰枠です。明治40年の竣工です。「上敷免製」の刻印のある日本煉瓦深谷工場製の煉瓦を用いていること、建設に当たる経緯や図面類が残っていることなどのほか、煉瓦造の河川構造物が埼玉県東部地域に特徴的に残るといって、近代化遺産、土木遺産的価値観を重視した指定であることが大きな特徴といえます。



庄兵衛堰枠(市指定)

**絵画** 指定資料には、野牛観福寺に伝わる新井白石の肖像画があります。白石五世の孫新井成美が3幅作らせたもののうちの1幅です。戦前までは、毎年5月19日「筑後様まつり」のおりには本堂に掛けて供養していたといえます。資料的価値も高く、地域の誇りとしても重要な資料です。「正徳の治」と呼ばれる善政を敷いたことで有名な徳川家宣の政治ブレーンとしての白石のイメージや、野牛村の村政運営のイメージは非常に清廉なもので、当市を象徴する文化財の一つであります。

**彫刻** 指定文化財7点はいずれも仏像です。中でも安楽寺の薬師如来坐像や大徳寺の大日如来坐像は、室町時代に遡るもので、鎌倉街道中道沿線の中世寺院に残された資料として地域的特徴の強いものであるといえます。特に、大徳寺の大日如来坐像は、現在の像以上に、胎内から発見された印を結ぶ両手先が、元弘の乱にまつわる伝承を裏付ける資料として大変重要です。これまで評価の定まらなかった寺伝についても改めて検討する必要があります。

また、未指定ながら3軀残されている金銅仏のうち、興善寺の火災残材廃棄坑出土の如来形立像は、平安末に遡りうる資料であり興善寺の創建伝承との関わりのうかがわれる資料として、

上野田の個人蔵の薬師如来立像は、家祖にまつわる伝承を持つものとしてともに貴重な資料です。

さらに、篠津天王様の山車の彫刻や篠津久伊豆神社の社殿彫刻を手掛けた立川音吉（芳）の子孫である立川金禄の残した彫刻群は、地域の特徴を示す文化財の一つとして大切にしたいものです。立川金禄は、家業の宮大工の傍ら朝倉彫塑塾に学び「軍鶏」などを題材とした彫刻で日展に22回入選を果たすなどの経歴を持ちます。仏師としても活躍し、四国金毘羅宮の隨身像やさいたま市普門院の本尊釈迦如来、市内では太田新井安楽寺の十三仏龕、興善寺の釈迦涅槃像、四天王像などを残しています。

**書籍・典籍** 指定資料では、高岩天満神社の山岡鉄太郎墨跡が挙げられます。未指定の中には、新井白石の著作『折たく柴（の記）』の写本があります。野牛の村役人格の家に伝えられた資料で、伝来に関する記録は残されていないものの、領主の著作に関心を寄せて読んだであろうこと、また、非常に良好な保存状態であることはこれを大切に扱ってきたことを推測させます。地域に残るべくして残った文化財です。

**古文書** 6点の指定資料のうち、最もまとまりのあるものは、小久喜村の名主家鬼久保家に伝えられた「鬼久保家文書」です。3,600点余を数え、近世から近代の村の歴史を裏付ける貴重な資料です。特に年貢割付状は正保4年(1647)以降天保期までほぼ完存します。

岡泉村の名主家文書「澁谷家文書」には、流量が減少した日川の流路跡を新田開発していく様子やその後の検地帳、開発地域の絵図などが残されています。

新田開発に関する古文書では、未指定ながら「富士庫家文書」を上げることができます。18世紀前半に町人請け新田として開発された「彦兵衛新田」の開発や検地に関する文書群で、「彦兵衛」という地名の由来にもなったものです。

古文書から各村の様子を読み解くという意味では、未指定ですが篠津村の村役人格の黒須家文書から、近世の町場として賑わいを見せた篠津村の様子をうかがうことができます。特に、木綿や紅花の間屋を営んだ商家「篠川」の紬蔵や紅花干場、元荒川から水路を引いた河岸場の様子などがわかるほか、文政10年(1827)の農間余業の業種や従事者数からは、33種124人が従事していたことがわかります。この文書で注目されるのは、店を持たない露天商のような業態が12人、質屋9人、煮商居酒屋8人のあと、機織、綿布売買7人、綿打6人と続くことです。2軒記録されている紺屋と合わせ、埼玉郡域の代表的産物「木綿」に関する職業が15人いたことが読み取れます。近隣他村に比べ倍以上の村高があり、日光街道粕壁宿と中山道鴻巣宿とを結ぶ脇往還沿いに位置し、元荒川の水運にも恵まれた篠津の隆盛を伝える文書群です。

また、高岩忠恩寺に伝えられた「忠恩寺文書」は、点数は少ないものの、「太田資正棟別免許状」おたすけまさむなべめんきよじょう「高岩山由来（近世の写し）」など中世の状況を伝える資料が残されていることは非常に重要です。鎌倉街道沿いの古刹ならではの資料といえます。

**考古資料** 指定文化財の1件は、白岡地区にあるタタラ山遺跡からの出土遺物群で、縄文時代前期初頭の花積下層式期の土器9点、石器25点、石製装飾品41点からなります。花積下層



立川金禄作「軍鶏」

式期の大規模集落遺跡自体が稀で、文化内容を物語る資料が非常に少ない中で、全体像のわかる土器やバラエティに富んだ石器が得られたこと、何より豊富な石製装飾品群の出土は非常に貴重であるといえます。入耕地遺跡1号住居跡出土の五領式土器のセットや清左衛門遺跡の縄文時代晩期の墓坑群から出土した一括資料群など、その当時の文化内容を物語る良好な出土資料も指定候補といえます。



清左衛門遺跡の墓坑群出土の土器群

**歴史資料** 指定資料は10件あります。筆頭は、白岡八幡宮に伝えられる「鬼窪八幡宮<sup>わにくち</sup>鰐口」でしょう。「武州寄西郡鬼窪八幡宮鰐口」という銘文に加え「享徳五年」という年号は非常に重要です。享徳は3年で改元され康正に替わります。実際は康正2年のはずです。しかし鎌倉公方を支持する勢力は、改元を受け入れず享徳を使い続けたといえます。享徳五年という銘は、このとき鬼窪氏が鎌倉公方に組していたことを暗示する資料だといえるかもしれません。

実ヶ谷の阿弥陀三尊種子板石塔婆と興善寺の中世石造物群に含まれる阿弥陀一尊種子板石塔婆は、ともに13世紀に遡る板石塔婆で、武蔵武士の足跡を示す重要な資料です。

また、上野田の名主家に残された鷹場関係資料群は、鷹場<sup>おとらえかいば</sup>（御掟飼場）の管理に際して領主である一橋家から火縄銃（短筒）を借受ける背景や鑑札などがセットで鉄砲とともに残されています。幕末の村方の様子が垣間見える興味的な史料です。

## ② 民俗文化財

民俗文化財のうち、有形民俗文化財は市指定文化財18件があります。また、無形民俗文化財には市指定文化財が3件あります。

有形民俗文化財のうち、篠津天王様の山車5台と篠津天王様の神輿はこの地域の夏祭りとして普遍的に行われる「天王様」行事に用いられるものです。山車を持っている地区は、篠津と岡泉の2地区です。特に篠津天王様の山車は、豪華な彫刻の施されたもので、篠津久伊豆神社の社殿彫刻とともに木綿や紅花を商った豪商「篠川」が資金提供し、同じ宮大工集団を使って彫らせたものと伝えられています。篠津の各耕地に伝えられる5台の山車は、地域のシンボルとしてしっかりと根ざしています。

有形民俗文化財の一つとして神社に奉納された大絵馬群を挙げるができます。既指定の資料群としては、柴山諏訪八幡神社の奉納絵馬群、下大崎住吉神社の奉納絵馬群、高岩天満神社の奉納絵馬群が挙げられます。また、未指定のものとして篠津久伊豆神社の奉納絵馬群が挙げられます。人々の信仰という視点でみると白岡の石神社の奉納しゃもじ群、上野田の正伝寺



正伝寺開山様の奉納小絵馬群



開山様の奉納小絵馬群などがあります。人々の祈りの象徴として残された絵馬なども地域の伝統を受け継ぐ大切な文化財です。

無形の民俗文化財は3件の指定物件があります。一つは小久喜の獅子舞です。「小久喜のささら」として親しまれています。現在のさいたま市深作から江戸時代後期に伝えられた3頭立ちの獅子舞で、もともと旧暦9月に豊作御礼として舞われ、村廻りも行われていたようです。現



現在の一里塚（県指定）

在は4月に予祝行事として奉納されており、村廻りは行われていません。演目としては「初手庭」「中庭」「幣掛・鶴の巣籠もりの舞（女獅子隠し）」「注連古喜・鶴の巣籠もりの舞」などのバラエティがあるほか、神社拝殿前では祈禱獅子が奉納されます。また、この獅子舞は、奉納すると雨が降ると言われ「泣きざさら」と呼んで、雨乞いに使われた記録も残されています。市立南小学校では、郷土文化研究クラブの児童たちも保存会の方々の指導を受けています。毎年春になると「今年のささらはいつだ？」といった声が聞かれるほどです。

### ③ 記念物

市には、県指定史跡1件、市指定史跡1件、国指定天然記念物1件、市指定天然記念物4件があります。

県指定史跡は、日光御成道下野田一里塚です。東西両塚が残るもので、江戸から11番目の一里塚に当たります。西塚の塚上にはエノキの古木が聳えます。東塚のエノキは枯死し、現在はムクノキが植えられています。日光御成道は鎌倉街道中道を基に整備されたものといい、鎌倉街道に比定される道筋が西側を通っています。日光御成道は、現在は県道さいたま幸手線に姿を変え杉並木も失われましたが、一里塚は昔のままの姿で残されています。

市指定史跡は、正福院貝塚です。正福院の墓地にあり、かつては破碎貝の分布が5~6か所確認できました。貝塚部分の発掘調査が行われていないため、明確な時期決定ができませんが、正福院本堂の建替えに伴う発掘調査の結果、縄文時代前期黒浜式期の住居跡2軒が確認されていますので、これに近い時期のものと思われる。周辺では、茶屋遺跡、白岡東遺跡、神山遺跡などでも貝が出たという話が聞かれ、蓮田市黒浜付近から続く地点貝塚群の北限を示す貴重な貝塚群であるといえます。現在の元荒川に沿って「海」が入り込んでいた頃から、人々は水の恩恵を享受していたことがうかがわれる遺跡です。

天然記念物は5件です。国指定の1件は種の指定を受けているシラコバトです。近年激減しており、平成28年の調査では残念ながら確認できませんでしたが、爪田ヶ谷に隣接する民間動物公園で一定数の生息が確認されており、市域の東部への飛来の蓋然性は高いといえます。

市指定の4件はいずれも樹木です。白岡八幡宮のカヤ、白岡八幡宮のイヌザクラはいずれも八幡宮の社叢の一角を占めるものです。白岡八幡宮のカヤは樹齢500年と推定されるものですので、鬼窪氏の活躍を見ていたかもしれません。また、八幡宮の参道には、「八幡太郎義家駒つなぎの杉」といわれる巨木の根株が残っています。この根株は『新編武蔵風土記稿』の八幡

宮の挿絵にも描かれています。

#### ④ その他の文化財

いわゆる文化財 6 類型に含まれないものの中にも、地域に深く根ざした様々な物(モノ)・事(コト)・所(トコロ)などがあります。こうしたものも後世に残すべき文化財といえます。

例えば、市内には、大小合わせると 25 を超える用排水路が掘られています。「備前堀川」「姫宮落川」「庄兵衛堀川」「隼人堀川」「野牛高岩落川」「新堀」「見沼代用水」「上田用水」「笠原沼用水」「黒沼用水」などです。これらの用排水路には、人名が付されたものや地名が付されたものなどがあります。「備前堀川」の備前は伊奈備前守から、「姫宮落川」は通称金兵衛堀川とも呼ばれ、大河内金兵衛の名をとったものといわれています。「笠原沼用水」「黒沼用水」は代替水路を残して干拓された沼地の名前が冠されています。

これらの水路にかけられた橋についてみてみましょう。「義理橋」・「往還橋」(岡泉)「六兵衛橋」(太田新井)「鷹匠橋」(白岡・野牛)「金剛寺橋」(白岡)「陣屋前橋」(荒井新田)など、伝承とともに名称が伝えられる橋があります。隼人堀川に架かる「義理橋」は、將軍の日光社参の折に、地元の村役人たちが、將軍の行列を鹿室村境で出迎え、裏道から先回りして「義理橋」を<sup>かなむろ</sup>通って上野田村境まで見送って義理を果たしたという言い伝えからその名が付いたといえます。白岡の「鷹匠橋」は、磯川という川に架かっていた橋で、殿様の鷹狩りに随行する鷹匠の便を図って架けられた橋だといわれています。

道路では、「慈恩寺みち」「幸手みち」「原市みち」「菖蒲みち」「鴻巣みち」などの名称が、庚申塔などに併設されることの多い道しるべから読み取れるほか、「のよみち」「鎌倉街道」「御成みち」などの名称が語り継がれています。特に言い伝えの残る二筋の鎌倉街道は、いずれも中世の白岡の歴史を紐解くうえで大変重要な位置を占めますし、「のよみち」は、武蔵七党の野与党鬼窪氏と篠津との関係を今に伝えるものとして大切にしたい名称です。

このほかにも、四季折々の年中行事やそれに伴う行事食、屋敷神、講などの民間信仰、生活の中での様々な言い伝えなども後世に伝えたい大切な文化財として挙げられます。

一例を挙げますと、お天気にかかわる言い伝えに「富士南(南西)に入道雲が出ると三把稲(三把の稲を刈り終わらないうちに夕立になる)」とか「北鳴りは雨が少ない(北から来る雷は、音はするが雨は少ない)」、また「妙本寺(東隣の宮代町)の鐘が近くに聞こえると天気が悪く、東北線(現 JR 宇都宮線)の汽



隼人堀川(六兵衛橋から)



左

せうぶ道 (しろうぶ)

願主

新山白茶  
岡村屋  
田組講  
中

道しるべ(通称:塚の越の庚申様)

車の音（西方）が近くに聞こえると天気がよくなる」なども面白い言い伝えです。

田畑の耕作にも特徴がありました。市域には、「柴山沼」「皿沼」「笠原沼」「クンキ沼」などの沼地や湿地が点在しており、これらの沼地を耕作する一つの方法として「掘りあげだ」という手法が用いられました。これは、浅い沼の底に溝を掘り、掘り上げた土砂を高く積んで陸を作り耕地とするもので、細長い耕地と掘り潰れとい



掘りあげだの様子（50頃 柴山土地改良区撮影）

われる水路が交互に形成される低地ならではの耕作手法です。現在ではほとんど見られなくなりましたが、沼の底を浚い、土砂を陸揚げするノロアゲジョレンやシャクシといわれる鍬など、低地特有の農耕具が数多く残されています。

## (2) 時期別に見た文化財の特徴

### ① 原始・古代

旧石器時代から奈良・平安時代頃までの様相を概観し、市内の遺跡から見える文化財の特徴をまとめてみましょう。

市内には、現在 86 か所の遺跡が確認されています。その多くが複数の時期が重複している「複合遺跡」です。これを時期別に見てみると、一番多くなるのが縄文時代中期の 56 遺跡、ついで後期の 43 遺跡、以下前期 22、早期 19 遺跡、平安時代 19 遺跡、古墳時代前期 16、奈良時代 13 遺跡などと続き、弥生時代は 0 となっています。縄文時代中期が多くなる傾向は、近隣でも似たような傾向を示します。遺跡の継続期間を考え合わせると、縄文時代早期から前期、中期から後期、古墳時代後期から平安時代というグループが目立ちます。

次に特徴的な遺跡を見てみます。縄文時代早期から前期では、この時期の拠点となる集落遺跡としてタタラ山遺跡が挙げられます。これまでに 70 軒に上るこの時期の住居跡が確認されています。現在の元荒川の谷筋を通る道を使った人々の交流や物資の流通の中継基地のような集落と思われます。東海地方の木島式土器や北東北の縄文尖底系土器群、有孔磨製石斧など、外来の遺物が多数見つかることもその証の一つでしょう。これまでに 60 点近く出土している石製装飾品の石材も外部から持ち込まれたものです。しかし、貝塚は形成されておらず、この時期には、元荒川筋の海進が進んでおらず貝塚が形成されるほど貝の採取が行われる環境ではなかったことがわかります。

続く縄文時代中期から後期にかけての特徴としては、市内の中期遺跡のほとんどが中期の終わりから形成され後期につながる傾向を持ちます。具体的には加曾利 E III 式期から後期堀之内 I 式期にピークを迎えます。この傾向が強い遺跡は、大山地区の皿沼遺跡、白岡支台では山遺跡、慈恩寺支台では下小笠原遺跡や本田下遺跡などです。もう少し継続期間が長く晩期まで集落形



成が認められるのが、白岡支台だと入耕地遺跡や前田遺跡、慈恩寺支台だと清左衛門遺跡などです。中でも、入耕地遺跡や前田遺跡、清左衛門遺跡などでは、「環状盛土」といわれる盛土や盛土内側への人工的な窪地の造成などが見られます。また、これらの遺跡は、湧き水などを巧みに取り込んだ水場を持っていることが多く、水場を使った食料加工等が行われていたことがわかってきました。

さて、市内では、弥生時代の遺跡と、古墳時代の高塚墳墓であるいわゆる「古墳」は確認されていません。これも当市の原始・古代の特徴といえるかもしれません。

しかし、古墳時代前期の集落はいくつも確認されており、他の地域同様水田耕作が始まっていたものと推定されます。古墳時代の中期にはいったん集落形成が少なくなりますが、後期以降平安時代まで集落が継続する遺跡が現れます。篠津の中妻遺跡は好例です。6世紀代から集落形成が始まり、9世紀まで継続しています。おそらく10世紀以降も集落は営まれ続け、中世へ続きます。中妻遺跡では、発掘調査によって8世紀半ばの鍛冶工房跡が検出されています。この工房跡では、小鍛冶炉や排滓坑\*1などが見つかっており、鉄生産に関わる集落であることがわかっています。



南鬼窪氏館跡の炭焼窯

市内でほかに鉄生産に関わる遺跡としては、白岡地区のタタラ山遺跡、山遺跡、南鬼窪氏館跡、沖山西遺跡、日川宮市遺跡などが挙げられます。タタラ山遺跡では、中妻遺跡と並んで大口径の羽口が出土しており、付近に大鍛冶\*2が存在することをうかがわせます。山遺跡、南鬼窪氏館跡、沖山西遺跡では、古代に遡る炭焼窯が確認されており燃料炭の供給地であったと推測されます。日川宮市遺跡は調査例がなく時期判断が難しいところです。

## ② 中世

考古学的に見ると、中世の遺構や遺物の見つかった遺跡は27遺跡あり、時期別の数値の比較では、縄文時代後期に次ぐ数となります。これに、中世館跡や中世寺院、石造物所在地などを加えると数字はさらに増加します。

まず中世遺跡の状況ですが、白岡支台では、入耕地館跡を含む入耕地遺跡、地下式坑や掘立柱建物を検出した正福院貝塚、興善寺の所在する神山遺跡、篠津久伊豆神社のお膝元中妻遺跡など枚挙にいとまがありません。慈恩寺支台でも、中世墓坑群を検出した本田下遺跡、大徳寺を擁する赤砂利遺跡、清左衛門遺跡でも鎌倉街道の道路跡と思われる遺構が検出されています。

これに中世寺院12寺（中世遺跡での例示を含む）、中世神社4社、中世館跡8（伝承地を含む）などを合わせると濃密な分布域が浮かび上がります。

\*1：製鉄の工程で出る溶けた不純物の塊を「鉄滓」と呼び、これを廃棄した穴を排滓坑と言う。

\*2：工房内に設けられ精錬や製品制作を行う鍛冶を「小鍛冶」と呼ぶのに対し、原料から鉄を精製する製錬を行う鍛冶炉を「大鍛冶」と呼ぶ。大規模な炉となることから屋外に設けられ、火力を上げるためのふいごも大きく、付けられた送風口である羽口の口径も大きくなる。

古手の板石塔婆を確認しましょう。指定文化財の2件のほか、紀年銘のある13世紀代の資料では、岡泉丸山共同墓地の資料(阿弥陀一尊と思われるが紀年銘上部で欠損)が弘安9年(1286)、入耕地遺跡第13地点出土資料(阿弥陀三尊種子)が正応2年(1289)の銘を持ちます。また、紀年銘は読み取れませんが、篠津弁財天の板石塔婆もその形状から初発期またはこれに近い時期のものと思われます。

中世起源の仏像や金石資料はどうでしょうか。大山地区では、南北朝期と思われる小金銅仏が1軀あります。白岡支台では、興善寺の達磨大師坐像と市内での伝世資料ではありませんが県指定資料の阿弥陀如来立像、白岡八幡宮の鬼窟八幡宮鰐口が挙げられます。慈恩寺支台では安楽寺の薬師如来坐像と大徳寺の大日如来坐像、上野田の小金銅仏があります。現存しませんが、上野田の高祖明神社(鷲神社)には天文年間の銘を持つ鰐口があったといえます(『新編武蔵風土記稿』)。

中世文書の状況はどうでしょうか。現存資料としては、野牛大久保家文書の北条氏繁判物と、忠恩寺文書の太田資正棟別免許状の2点です。写しとして忠恩寺文書の高岩山由来と上野田大徳寺の大徳寺縁起、正福院の北条氏繁寄進状(武州文書・国立公文書館)があります。

### ③ 近世

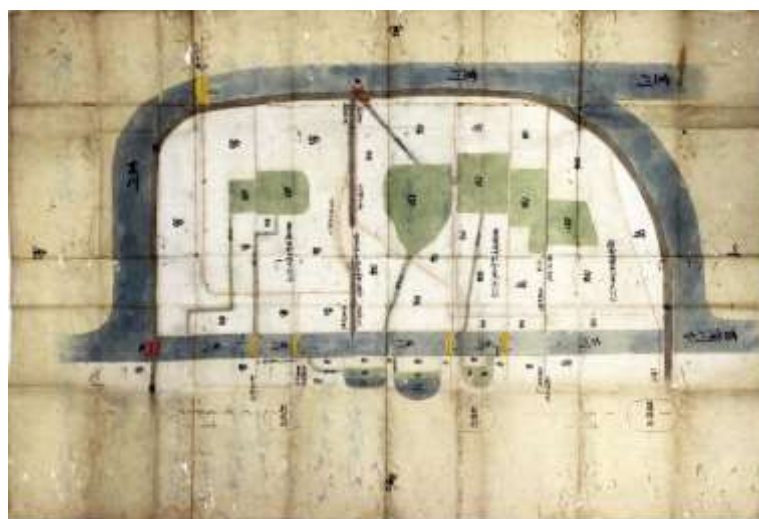
近世以降の資料は、それ以前に比べると豊富にあります。古文書などを中心に考えますと、大山地区では柴山と荒井新田に柴山沼やその周辺の治水等をめぐる争論の裁許絵図が残されています。白岡支台地域では、旧白岡村の近世文書が充実しています。名主家、村役人格の家に伝わる古文書群で、「白岡村新宿村水除堤争論裁許絵図」、「白岡村小久喜村千駄野村水口争論裁許絵図」など排水対策に関する争論の裁許絵図などは重要な史料です。興善寺に伝えられる朱印状群なども、古刹たる所以を示す資料といえましょう。村政を物語る資料としては、小久喜村の名主家文書「鬼久保家文書」が重要です。水害などの災害に関して年貢の減免を願い出たり、日光道中や中山道への加助郷免除を願い出たりする資料が目につきます。

慈恩寺支台では、上野田の名主家文書「濱田家文書」や岡泉の名主家文書「澁谷家文書」などがまとまった史料群です。澁谷家文書では、日川堤の修繕にかかる資料や山城堀の排水に関わる争論に関する文書などが重要です。濱田家文書では、御鷹場域内ならでの史料や御成道沿いの整備に関する史料などが重要です。

人々の暮らしに関する資料では、絵馬などに見られる信仰のほか、庚申講や稲荷講などの「講」に関する史料が散見されます。

また、小久喜の獅子舞では、「獅子連中例記」という獅子舞伝承や運営にかかる史料なども残されています。

また、金石文にも様々な情報が残されています。前述の庚申講の講中で立てた庚申塔や月待講で立てた二十三夜塔などのほか、様々な供養塔や記念碑の類などには、村方の様々な情報が刻まれているものがあり



白岡村新宿村水除堤争論裁許絵図(細井家文書)



ます。例えば篠津久伊豆神社にある「知足ちそく霊神れいしんのひ之碑」は、領主である旗本徳永氏とのかかわりや名主角右衛門の伝説が記されています。また、篠津の青雲寺にある「菱沼ひしぬま溪斎せいさい翁墓碣銘」には、篠津村の名主菱沼次兵衛が行った、荒川、星川の治水対策や農地改良などの事跡が記されています。これらは、地域にとって重要な内容を伝えています。

#### ④ 近代以降

近代以降の文化財として考えられるものとして、産業や交通の発達に関するものや、自治体や自治体の合併に関するものなどが挙げられます。

まず、交通についてですが、明治18年に現在のJR宇都宮線が開通します。当初白岡には「信号所」が設けられました。白岡駅開設の陳情は明治30年代から繰り返し行われますがなかなか実現せず、明治43年2月ようやく設置されます。これらの経緯は「鬼久保家文書」から読み解くことができます。開業を記念して中島撫山が撰文し、白岡駅近くに建てられた記念碑「新設白岡車站之記」からは、当時の白岡周辺の産業の様子、人々の暮らしぶり、気風などの情報を読み取ることができます。

産業に関するものとして、農業関係では、「耕地整理記念之碑」（千駄野稻荷神社）や「柴山伏越改造之碑」（柴山伏越）「長寿園記」（爪田ヶ谷観音堂）「南埼乾繭組合記念碑」（白岡八幡公園）などがあります。このうち、「長寿園記」は製茶業を営み、国内外に広く埼玉茶を普及した斎藤長蔵翁の事跡を記したもの、「南埼乾繭組合記念碑」は、昭和初期からの白岡近郷での養蚕業の振興にかかる内容が記されています。

また、岡泉の澁谷家文書には、日勝村長を務めた澁谷塊一が推進した「日勝村経済更生運動」関係の史料群が残されています。澁谷は、昭和5年、「埼玉」という品種のスイカを那須御用邸で昭和天皇に献上しています。「西瓜乃栗」という史料には、「形状ハ小サキ長円形ヲナシ、果皮ハ線状網文ニシテ果肉ハ橙黄色ヲ呈し、風味極メテ淡白上品ナリ」というスイカの特徴が示され、特産品開発に熱心に取組んでいた様子がうかがえます。

日勝村は、昭和7年農業経営改善5か年計画を策定し、大山村とともに県の「経済更生運動推進村」の指定を受けます。日勝村では、耕地整理組合が設立され、沖山地区や日勝村西部などで耕地整理や開墾などが推し進められていきますが、日中戦争に向かっていく中で、「埼玉」を高級果物として定着させようとした目論見は実を結ばなかったようです。

市内で広く栽培される梨は、明治43年の大水を契機に作付面積を増やしていきました。特に、関東造盆地運動の影響を受け、ローム台地上ながら土地が低い大山地区では、皿沼や柴山沼を擁し地下水位が高いことを利点に替え、みずみずしい梨がとれることを活かして販路を拡大していきました。栽培品種の変遷や栽培用具の変遷、運搬具の変遷、また、共同選果などの組織の変遷など様々な内容の物語が伝えられています。



竹籠に入った西瓜「埼玉」

明治43年の大水は、生活史の中にも大きな影響を与えています。大山地区では、柴山沼を囲む屋敷を中心に「水塚」という洪水対策の塚が築かれています。それ以前からも柴山沼の内水氾濫への備えとしての水塚を築く家はあったようですが、明治43年の大水の時に床上までの浸水を経験し、水塚の高増しをしたとか、それまでなかった水塚を作ったという聞き取りが得られています。市内では、水塚は築かなくても、納屋の軒下に水害対策として舟を吊るしてある家は現在でも見るすることができます。代々語り継がれてきた生活の知恵の一つとして、水との付き合い方が暮らしの中に染み込んでいるということができるでしょう。

道具の変遷について見てみます。農耕具は、作物はもちろん、耕す耕地の土の状況、道具を使う人の状況などによって道具も少しずつ変化するといえます。農家側でも道具を選んで使いますし、鍛冶屋に鍬の刃先などについて注文を出したり、自分で工夫したりしていたようです。少し広い視野で比較すると、地域的な特徴がわかりそうです。

職人道具はさらに繊細です。職業によって違うことはもちろんですが、同じ職人がいくつもの道具を使い分けています。例えば、一人の下駄職人がいくつものノコギリやノミを使い分けていたり、一人の紺屋職人が何種類もの「伸子（ハリ）」（染めた反物を干すときに使う両端に針の付いた竹ひご）を使い分けていたりします。こうした道具の違いは、職人の個性と共にその地域の風土や生産される品物の特徴を反映しているのかもしれない。

## 2 白岡市の歴史文化の特徴

当市のこれまでの文化財調査によって浮かび上がってきた情報を、文化財類型や時期別に整理し、地勢等と合わせて総合的にとらえると白岡市の歴史文化の特徴を以下のようにまとめることができました。

### Ⅰ 二つの鎌倉街道と中世寺社群

市内に「鎌倉街道」という伝承を持つ道筋が2つあります。一つは、市域東部を縦貫するように残された鎌倉街道中道に比定される道筋で、沿線には、安楽寺、大徳寺、正伝寺、忠恩寺、上野田鷲神社、高岩天満神社など、中世起源の寺社が並びます。この道筋を基に近世には、日光御成道が整備され、江戸から11番目の一里塚が置かれました。

もう一つは、小久喜の鬼窪尾張繁政（南鬼窪氏）館跡や寿楽院前から西進して篠津から来る古道を合わせたのち台地をおり、荒川の自然堤防沿いに南下する道です。

篠津・白岡・小久喜・実ヶ谷付近はかつて「鬼窪郷」と呼ばれていました。中世初頭、武蔵七党に数えられる野与党鬼窪氏が利根川筋と荒川筋の最接近点であり鉄生産の拠点であった篠津に目をつけ土着したことによります。鬼窪氏は、白岡支台ほぼ全域を勢力下に治め、血縁のある氏族は周辺に拡大していきます。この地域には、篠津久伊豆神社、興善寺、正福院、白岡八幡宮などの寺社が並ぶほか、いくつもの館跡が連綿と続いて築かれていることが発掘調査の成果からわかってきました。

このように2つの鎌倉街道とその周辺に並ぶ中世由来の神社仏閣は、白岡市の中世以降の歴史文化の特徴をよく示しています。

### Ⅱ 新田開発を巡る用排水路の開削と川の立体交差

市域は全体に勾配のゆるい土地柄です。水田地帯では、4,000分の1といわれる緩傾斜で、河川後背湿地や沼地が多く排水の難しい土地でした。

先人たちは、排水路を掘り、後背湿地を水田として開発してきましたが、用排水路の開削で何より苦心したことは、水路同士を交差させる必要が生じたことでした。「伏越」や「背越」などの構造は、開削はもちろんその後の管理にも大きな労力が必要でした。田が水につからないように堤を築いたり水口の開閉をしたり日常の管理が重要で、ひとたび出水すると、堤の上郷と下郷との間で堤を切るか切らないかの騒動が持ち上がります。しばしば争論となり、お上の裁定を仰ぐこととなります。こうした争論に関する絵図や裁許状は当時の水利を知る上で貴重な資料となります。

江戸時代の新田開発の歴史は、用排水路の開削と川の立体交差と排水を巡る争論の歴史であるといえることができ、地域の地勢を大きく反映した白岡市の歴史文化の特徴のひとつです。

### Ⅲ 排水の苦勞を乗り越えてきた低地の暮らし

市域は、排水に苦勞してきた地域です。それでも人々は、水のもたらす恵みを大切にして、災いと折り合いをつけながら暮らしてきました。その暮らしぶりを象徴的に残すのが市域西部の大山地区です。柴山沼や皿沼のある大山地区は、南の元荒川と北の星川に挟まれた土地柄もあり、絶えず排水に苦勞してきた地域です。

柴山沼を囲む柴山、荒井新田の家々では「水塚」が築かれ、水害に備える風土が形成されてきました。この地域の水塚は、元荒川や星川側より柴山沼側に発達し、沼側の塚の方が高い傾向が見られることから、河川氾濫以上に柴山沼の内水氾濫に備えたものと思われます。

柴山沼や皿沼周辺には「掘上田」が発達し、掘り潰れの水路は集落内まで引かれ、田畑との往復や作物の運搬などに使われていたようです。水害時にはこの舟が物資の輸送や避難に使われたといえます。

また、沼周辺の入会権に関する争論裁許絵図などが残されていることから、古くから、周辺各村が利用することのできる範囲などが決められていたことがうかがえます。

特産の梨栽培が盛んな理由も、地下水位が高くみずみずしい梨がとれることによります。

大山地区に限らず、市域では、水のもたらす災いや不便さを乗り越え水を味方につけ、魅力を引き出して水とともに暮らしてきたのだといえます。このことは、白岡の歴史文化を紐解くうえで極めて大きな特徴であるといえましょう。

### Ⅳ 新井白石の残した歴史文化

6代将軍徳川家宣の儒臣として旗本となった新井白石は、相州高座郡に500石、野牛村で500石合計1,000石を領有しています。

白石は、野牛村に後背湿地の排水路「白石様堀」を開削させ、見事な美田に変えたほか、救荒対策として「郷倉」を設けています。

村の鎮守の久伊豆神社の扁額は白石が正徳の朝鮮通信使の製述官イ・ヒョンに頼んで揮毫してもらったものを下書きとしていますし、白石が村方の争いごとに裁定を下した文書が残されているなど、村政にも大きな影響を与えていたようです。

野牛村の名主家には、白石自筆の漢詩のほか白石の肖像画を奉納した新井成美（白石5世の孫）の漢詩などを表装した掛け軸が伝えられており、白石やその後の新井家が領地の野牛村を大切に思い、名主等村方とも交流していたことを示すものといえます。

野牛地区には、このほかにも新井白石ゆかりの文化財が残されています。

村人も白石を慕い、毎年白石の命日である5月19日は「筑後様まつり」として継承されて行きます。昭和10年代に途絶えますが、近年、途絶えていた祭りが復活したことは、地域の歴史文化の興隆に大きく寄与するものとして評価に値します。

新井白石の事績や白石に関わる文化財は、野牛にとどまらず広く白岡市全体の歴史文化に大きな影響を与えているといえます。

### Ⅴ 篠津天王様の祭礼に見る近世町場の面影

篠津は、野与党鬼窪氏の本拠地として開発されますが、近世を迎えると日光街道粕壁宿と中山道鴻巣宿とを結ぶ脇往還の町場として栄えます。また、元荒川の水運を利用して、近郊の木綿などの流通拠点となったことが知られています。

木綿や紅花問屋として隆盛を誇った「篠川」は地域経済だけでなく文化面でも大きな足跡を残しています。篠津久伊豆神社の社殿彫刻や優れた彫刻を持つ5台の山車は、町場としての篠津の潜在力の高さを示すものといえます。1村で5台の山車を持つ篠津天王様の祭礼は、単なる村祭りとしての域を脱したものと評価できますが、その背景には「篠川」の財力があつたことは疑う余地もありません。

篠津の歴史文化は、河川から得た砂鉄を原材料とした鉄生産に始まり、鉄と河川交通に着目した鬼窪氏の土着で大きく前進し、近世の物流や経済の発達に裏打ちされた商家「篠川」の出現で頂点に達し、「軍鶏」の彫刻で一世を風靡した立川金禄へとつながって行きます。

地域全体の歴史文化を育む揺籃としての役割を果たした町場「篠津」の繁栄は、篠津の天王様の祭礼にその面影を残しています。



## 白岡市の歴史文化の特徴



この5つの特徴に共通し、時代や地域を超えた大きな背景として存在し、絶えず通奏低音のように流れているテーマがあります。これを「水とともにあった人々の暮らし」と表現することとしました。これこそが、白岡の歴史文化の根底にある特徴であるといえます。

このような白岡市の歴史文化の特徴を十分に把握し、保存・活用にあたっては、特徴を生かした取組を展開するよう配慮します。